

問題一 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

創造(クリエイト)よりも単純なレベルで、アウトプットが勉強の効率を上げる要素となっている。

(A)、教科書に <sup>a</sup> いんさつ<sup>a</sup> されている漢字をじつと見ても、なかなかそれを覚えることはできない。これは、インプットだからである。しかしそこで、「どうして、この漢字ができたのだろうか? 何故この文字が使われたのか?」などといった疑問を持ち、それについて考えることで、その漢字を覚えやすくなる。

あるいは、単にアウトプットを自分に強制するやり方もある。最も一般的なものは、実際にその漢字を、自分の手を使って書いてみるのだ。教科書を見ているだけのときよりも、ノートに写す行為によって、最低限のアウトプットが実行され、それに伴って頭脳が活動する。これも記憶の効率を高める方法といえる。学校の <sup>b</sup> じゅぎょう<sup>b</sup> で、先生が黒板に書いた文字を写す、という動作を <sup>c</sup> 奨励<sup>c</sup> している理由がここにある。

(B)、<sup>I</sup> その漢字を、書道のように大きな紙に毛筆で書いてみたら、その漢字を頭により強く焼き付けることができる。記憶が確固たるものとなる。書道は、鉛筆でノートに書くだけの行為よりも、クリエティブであり、また上手な文字、形の良い美しい文字を書こうとして、頭脳が活動する。単に出力するだけでなく、創造的な思考が加わっているため、より「勉強」になる、ということである。【ア】

もつと簡単な例を挙げれば、スポーツをいくら観戦しても、そのスポーツの技術は上達しない。音楽をいくら聴いても、楽器の演奏が上手くなるわけではない。インプットの量が増えても、せいぜいなるのは評論家くらいだろう。その評論家も、評論というアウトプットをしなければ、評論の技術は上達しない。【イ】

実際にそのスポーツを楽しんでみる、実際に楽器を演奏してみる、というアウトプットによって初めて、その技法を確かに学ぶことができるし、さらには、単なる体験ではなく、実際に試合をしたり、コンサートを開いたり、あるいは作曲をしたりといった、創造的な体験を重ねなければ、その道で上達することはないし、一流にはなれないのである。

人から教えてもらえるのは、単なる体験のレベルである。技術の基本を教わることはできる。ちょっとしたルール、<sup>からだ</sup> 躰<sup>からだ</sup> の使い方、何が良くて、何が間違っているのか、などの <sup>ア</sup> デイテール<sup>ア</sup>。これらの基礎的な部分は、それぞれのジャンルで体系化され、言葉で伝達できるように整理されている。だからこそ、教えてもらうことができる。 <sup>II</sup> この状況が、学校というものを成立させ、教育の大部分のステップとなっている。

(C)、創造的な体験は、自分の頭の中から湧き出るもの、極めて個人的な体験であるため、外部からは、せいぜいヒント的なものしか得られない。しかも、そのヒントさえも自分が見つけるものである。「これがあなたの上達のヒントです」と教えてもらえるようなものでは基本的にない。【ウ】

一対一の個人レッスンを受けるような状況が長期間 <sup>d</sup> けいぞく<sup>d</sup> し、個人の成長までも見守り、その人の個性を十分に理解した指導者ならば、ヒントが <sup>いくぶん</sup> 幾分的<sup>いくぶん</sup> 確に出せる、という程度だろう。 <sup>III</sup> 学校のように多人数を指導しなければならない先生には、まったく不可能な行為といえる。【エ】

ある個人をずっと見守っているのは、結局は本人以外にいない。(D)、もし学ぼうと思つたら、自分を先生にするしかない、という理屈になる。

自身を見守るには、自分を <sup>イ</sup> 客観視<sup>イ</sup> できなければならない。自分がどう考え、どうしたいのかを常に観察する別の自分が、あなたを指導する適任者である。【オ】

自分が感情的になったときも、その冷静な先生が、あなたを落ち着かせるだろう。この先生は、周囲とあなたの関係にも目を配って、的確なアドバイスをしてくれるから、あなたは、もう周囲を気にすることはない。むやみに他者と自分を <sup>e</sup> ひかく<sup>e</sup> して、傲<sup>おご</sup>つたり、あるいは僻<sup>ひが</sup>んだりする必要もない。

感情的なエネルギーは、自分の創造にぶつける。自分の感性を自分の思考に注ぎ込むことができるようになれば、創造的な「勉強」が可能になるだろう。結局は、そういった <sup>f</sup> 道理<sup>f</sup> で、本当の勉強の楽しさが湧き上がってくるものだ、と考えられる。

繰り返し返そう。学びたかつたら、自分を先生にすること。

例外は、初歩の段階だけ。初めだけは、他者から学べる。それは、千歩の道の最初の一步だけだ。それくらいの割合だろう。あとは、自分の歩き方で進む。勉強とはそういうものだ。

森博嗣『勉強の価値』より 一部改変

問一 傍線a～fのひらがなを漢字に直し、漢字にはよみがなをつけなさい。

問二 空欄A～Dに入るもつとも適したことを次の選択肢のなかからそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。(ただし、同じ選択肢を二度使うことはない)

ア さらに    イ なぜなら    ウ たとえば    エ つまり    オ しかし

問三 次の一文が入る箇所を本文中の【ア】～【オ】のなかから一つ選び記号で答えなさい。  
もし外部から与えられたら、それはもう創造的ではなくなるからだ。

問四 傍線Iの理由を、「から。」に続くように四十字以内で抜き出しなさい。

問五 傍線ア「ディテール」の意味を漢字二字で答えなさい。

問六 傍線IIとはどういう「状況」か、六十字以内で説明しなさい。

問七 傍線IIIのように言える理由としてもつとも適したものを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。

- ア 個人を見守ることができるのは本人だけであり、他人が的確な助言を与えることは不可能だから。
- イ 学校の先生は全員の学力を引き上げるのが仕事であり、学生の個性に目を向ける必要はないから。
- ウ 多人数を相手にしていると、その人の個性を理解し、長期的な成長を見守ることはできないから。
- エ 多人数を相手にしているため、創造的な体験のおもしろさを全員に理解させることは難しいから。

問八 傍線イ「客観」の対義語を漢字二字で答えなさい。

問九 本文の内容と合致しないものを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。

- ア 漢字を覚える時は、見るだけよりも書きながら覚える方が記憶に残りやすい。
- イ スポーツ観戦を積み重ねれば、上手な評論家にはなることができる。
- ウ その道で上達するには、単なる体験ではなく、創造的な体験を重ねるしかない。
- エ 感情を自分の創造に注ぎ込むことで、勉強の楽しさを見出すことが可能になる。

問題二 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

技術一般を考えたとき、それがほとんど人間の存在そのものと関わってきたことは明らかである。どのような進化を辿ったにせよ、人類が誕生して以来、技術がその生活を支えてきたからである。文化を、人間の生活の<sup>a</sup>営みに関わり、それを一定の範囲のなかに規定する、有形、無形のすべての制度、<sup>b</sup>かんしゅう、行動規範と定義するとすれば、当然ながら、<sup>I</sup>ある社会の持つ技術体系は、すべて文化に属する。

農耕社会においては、穀物栽培がその<sup>c</sup>こんかんを占めるが、単品種濃厚栽培を行いつつ、年々それなりの収穫をあげるために必要な知識(多くの場合その知識は、ノウハウとしての知識であり、(A)との区別は極めて曖昧である)というものを考えてみよう。

第一に天文学の知識が不可欠である。【ア】年間のどの時期に種を蒔き、どの時期に収穫するか、という最も重要な農作の<sup>d</sup>節目を中心に、農事暦をつくり管理するためには、天文学的知識が決定的に重要になる。観測、<sup>A</sup>記録、計算などのための器具、用具からソフトな技術にいたる一連の技術知が、農耕社会においては必ず生み出され、かつそれが社会全体とその成員の振舞いを規定する。これに伴って、気象に関するノウハウ、土壌、水などに関するノウハウ、植物や害虫、益虫などについてのノウハウも欠かせない。

第二には、穀物の貯蔵に関する体系が考えられる。穀物の特徴は、翌年まで持ちこして貯蔵が可能であり、それを管理しつつ適当に配分すれば、社会の成員は安定した食料の<sup>e</sup>きょうきゅうを期待できるところにある。【イ】そうだとすれば、大量の穀物を貯蔵するためのノウハウは、やはり農耕社会にとって不可欠となる。ここで言う「貯蔵」のノウハウとは、倉庫に<sup>f</sup>絡む貯蔵技術だけではない。倉庫に貯蔵された穀物を、不時の略奪から守るための警察や軍隊の機能、管理するための権力機能、分配の際の優先順位としての階級的分離のための規定などにまで、発展すべき極めて広範な技術システムである。【ウ】

第三に、穀物の特徴は、長期にわたって貯蔵可能な食料であるというところにある、ということは今見たところだが、その特徴は、そのまま<sup>II</sup>食料としての穀物の短所にもなりかねない。というのも、獣類や魚類の肉や果物は、本来何の手も加えないで食べることができるが、そのことが同時に長期貯蔵を困難にしているのと同様に、穀物は長期貯蔵可能であるが、調理抜きにそのままでは食料にならないからである。【エ】言い換えると、穀物に依存する食生活というのは、(B)に、調理に関する様々な技術を生み出すことになる。火のコントロール、調理用の器具、調度品の製造などなど、料理に関するすべてのノウハウは、穀物依存の生活に発していると言つてよいだろう。

(C)、この意味での技術は、最初に述べたように、人間の存在するところのほとんどすべてに見出すことができる。人間の生活空間は、まさしく農耕という行為に由来する技術を軸として組み立てられている。【オ】ここで、知識と技術との関係は、分離不可能であることにも注意しておきたい。そのためにノウハウというカタカナ語を敢えて使ったのだが、「どうすればよいか」という問いに対する答えを用意するものが「ノウハウ」であるとすれば、人間が生活していく上で繰り返し発せられるこの問いに対する「ノウハウ」を与える(D)な体系として、知識と技術との組み合わせが機能してきた。

このときの知識は、現代の科学のような、知識として独立したものではなく、(E)、生活経験に裏打ちされた、いわゆる「暗黙の知」を中心にしており、それ自体が(F)そのものでもあった。

村上陽一郎『文化としての科学／技術』より

問一 傍線a～fのひらがなを漢字に直し、漢字にはよみがなをつけなさい。

問二 傍線Iのように言える理由としてもっとも適したものを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。

- ア 文化とは人間の生活に関わるすべての制度や規範のことであり、その生活を支えてきたのが技術であるから。
- イ 文化とは人間の生活の範囲を定義づけるものであり、技術はその範囲を拡張させる役割を果たしてきたから。
- ウ 文化とは人間の生活を豊かにするものであり、技術の進歩によっても人間の生活は豊かになったと言えるから。
- エ 文化とは人間の生活を支える制度や規範のことであり、技術がすべての制度や規範を完成させてきたから。

問三 空欄Aに入るもつとも適したことを漢字二字で抜き出しなさい。

問四 次の一文が入る箇所を本文中の【ア】～【オ】のなかから一つ選び記号で答えなさい。  
この点こそが、農耕社会の最大の利点である。

問五 傍線ア「記録」と熟語の組み立てが同じものを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。  
ア 急病    イ 地震    ウ 長短    エ 握手    オ 寒冷

問六 傍線Ⅱはということか、「ということ。」に続くように二十字以内で抜き出しなさい。

問七 空欄B、Dに入るもつとも適したことを次の選択肢のなかからそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。(ただし、同じ選択肢を二度使うことはない)  
ア 偶発的    イ 総合的    ウ 分析的    エ 必然的    オ 突発的

問八 空欄C、Eに入るもつとも適したことを次の選択肢のなかからそれぞれ一つ選び記号で答えなさい。(ただし、同じ選択肢を二度使うことはない)  
ア そして    イ または    ウ つまり    エ しかし    オ むしろ

問九 空欄Fに入るもつとも適したことを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。  
ア 人類の進化  
イ 人間の生活空間  
ウ 人間の行動規範  
エ 生活に密着した知恵

問十 本文の内容と合致しているものを次の選択肢のなかから一つ選び記号で答えなさい。  
ア 人間社会が有する技術は文化の産物であるが、とりわけ農耕に関する知識や技能は人間の豊かな精神や感性を育むことに貢献した。  
イ 農耕社会の発展は、天文学や穀物の貯蔵に関する知識の蓄積を促したが、食物の調理に関するノウハウは農耕とは関わりなく発展した。  
ウ 穀物の貯蔵に関するノウハウは、食料を貯えることだけでなく、警察や軍隊、組織の権力機能や階級構造にまで結びつく技術体系であった。  
エ 人間の生活は、農耕という行為に由来する技術を軸に成り立っており、狩猟や採集、牧畜は人間の文化に何ら関わりを持っていない。